

# 檜の会

平成二十二年  
秋・冬号  
第三十四号

NPO 法人「檜の会」事務局  
京・下京区梅湊町八三一  
「ひと・まち交流館 京都」  
メールボックス49

## ◇「東近江路を訪ねる」～西堀栄三郎記念探検の殿堂・木地師のふるさと・書道文化観峯館～ 田中重太郎

快晴に恵まれた八月二八日(土)、「東近江路を訪ねる」会が催された。JR 能登川駅に集合の出席者二十八名はチャーターされたバスに乗込み、朝鮮通信使が通った街道を北上、愛知川に沿って走り、一路探検の殿堂へと向かう。車中、本見学会を企画、ご担当下さった西堀参与の名ガイドで和やかに楽しいムードにひたりながらの走行であった。

近代的な曲線美が天空を画する館の前には曾って灌漑用であった溜池が整備されてその前面にあつて海に浮かぶ大船を思わせるロケーションを呈している。館内ではマイナス二五℃の南極体験、昭和基地の内部の再現や幻想的なオーロラを観て自然の偉大さを目に沁みて感じました。

お昼は山深い紅葉尾(ゆずりお)の溪流館で谷川の水に棲む岩魚(イwana)のなか／＼ただけないフルコースに舌鼓を打たせていただきました。お昼のあとバスは、ます／＼愛知川上流の渓谷に沿って走り、日本美と日本人の魂に迫った白州正子が、かくれ里と讃えた蛭谷(ひるたに)、君ヶ畑へと進みました。



蛭谷の木地師資料館では小椋館長から文徳天皇第一皇子惟喬親王が、この地に幽棲された際に轆轤(ろくろ)を考案、木地挽きの業を伝授されて祖神となられたことで、数多くの木地師が住み、下って全国の木地師の統轄する立場となったこと等、古文書や事物を示されて解説して下さいました。続いてバスは君ヶ畑へと走りまわりました。此処では惟喬親王を祀る大皇器地租神社、親王の御殿として造営された高松御所(金龍寺)を外から見学しました。何れも木地師信仰の聖地と崇められている所です。

木地師の里に別れを告げ、山を下りて数多くの近江商人を輩出した五個荘へと戻って最後の見学地「書道文化と世界を学ぶ博物館・観峯館」を訪ねました。ユニークな五層の屋根の外観が特徴的な観峯館では、中国の書道文化の多くの資料を見学、学芸員から解説を受けました。西堀参与はじめお世話いただきました森口、荒木両常務理事、誠にありがとうございました。(当会理事) (※写真は筒井神社の鳥居をくぐって木地屋資料館へ向かう皆さん)

皆様のご意見、ご投稿などおまちしております。

企画・編集／檜の会会報編集室  
発行／季刊(一・四・七・十月)

## ◇第5回 「伝統文化の精華展」に想う

近藤富士金

総合芸術展は初めての会場である「ひと・まち交流館京都」で二日間に渡って開催させて頂きました。今回は染織・現代結び・金箔など、会員四名と賛助出展として漆芸・陶芸・釜師の三名の方のご出展を戴き七名の出展者の催事となります。あまり広くはない会場でしたが、バランスのとれた作品ですばらしい芸術展を開催することが出来ました。会場構成も当会理事の方のご協力を戴いて華やかになり、又天候にも恵まれて、二日間で百七十余名の参観者のお越しを頂きました。中には名古屋から二名の美術品の愛好家がお越しになり、熱心にご質問をなされ、さらし出品者の方々も丁寧に説明をされて良い雰囲気でした。地元京都府庁の広報課の方もお越しを頂き、色々と質問をされて京都の伝統工芸のすばらしさも語られて参考になりました。当日読売新聞の京都版に写真入りで掲載されたこともあり、新聞を観た方々にもお越しを頂き、質問もされて熱心でした。今回の二日間は有意義な工芸展だと私も感じました。理事・役員の方々も一丸となって良い催事が開催出来て成功裡に終ることができました。

これも一重に会員と企業の方々のご協力とご支援の賜物だと、感謝を致しております。

次回はもう一日多く三日間の催事が開催出来ればと思っています。伝統文化・芸術総合展を通じて次世代への育成と活躍を期待しながら、今後も「伝統文化の精華」というゴールをめざし、創造発信させて参りたいと存じます。会員の方々のご協力とご支援を宜しくお願い申し上げます。(当会専務理事)



(展示会場にて：出品者、役員の皆さん)

### ◇お能の鑑賞と研修（能の面白さ楽しさ） 脇谷英勝

十一月十三日（土）に、当会催事として観世流シテ方林宗一郎師を講師に、お能の鑑賞と能装束・面についてのお話、さらに謡曲「高砂」の稽古指導をいただいた。正・非会員合わせて四二名参加という盛況ぶりでした。

お能の鑑賞の前に能についての簡潔な説明があり、次に能装束・面についての実地の解説があった。実際に面の掛け方や扮装の様子について、懇切丁寧に分かり易く話していただき、単に演能者と鑑賞者という関係以上に、能楽に対する親近感と得難い体験をすることが出来た。謡曲「高砂」のお稽古・指導は、はじめに宗一郎師が一区切りずつ謡われ、それに続いて全員が声を揃えて謡う方法で行われたが、宗一郎師の発声の大きさ、すばらしさに一瞬ドギモを抜かれた感がありました。私なども、この松響閣のような稽古場での鑑賞は初めてであり、能楽堂などとは違った雰囲気、実に楽しくよい経験と想い出になったと感謝致しております。



(参加者の装束着付体験)



(楽屋や鏡の間での準備も解説頂きました)

「高砂」は、所謂「五番立て」分類での一番目物（脇能物・神能）で、神をシテとして神社などの縁起を説き、国の繁栄を祝福するもので、一般的に一番目物は戯曲性に乏しく、現代人の感覚に訴えるという点ではなじみず、舞台上で演能される機会が次第に少なくなっています。しかし、「高砂」は結婚式などでもよく披露され、おめでたいものとしてお正月にテレビ放送などで親しまれています。

「高砂」のあらすじや内容について詳述する紙幅はありませんが、古今集仮名序の「高砂・住の江の松も相生のように覚え、」を踏まえ、さらに藤原興風の「誰（たれ）をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなく」と「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾世経ぬらむ」を素地にしながら構成されており、作者世阿弥の教養の深さとテンポの早いさわやかな舞が見所となるかと思えます。

今後も定期能の鑑賞などの機会があればよいと思っております。

(当会副理事長・帝塚山大学名誉教授)

### ◇「正倉院展」研修と見学に参加して 藤田一郎

第六二回目の一般公開となる「正倉院展」をNPO檜の会の催事として参加、見学することが出来ました。前回の催事「大遣唐使展」見学に続く奈良訪問です。宝物見学の前に、参加三二名は会場の博物館会議室に向かい、当会理事長で奈良博の名誉館員でもいらつしやる河田 貞先生から配付された詳しい説明資料とともに正倉院宝物の特質や北倉と南倉の収蔵品の性格の違い、今年の見所などを丁寧に解説していただき、久しぶりの正倉院展見学に大変参考にさせて頂きました。千三百年以上も前の工匠たちによって生み出された数々の工芸作品を実際に目の前に致しますと、高度な材料知識と精緻な加工技術の確かさに裏打ちされた逞しい意匠力に改めて感動致します。

今回河田先生から見所のひとつとしてご指摘のありました「螺鈿紫檀五絃琵琶」や、「狩獵文銀壺」に注目するとともに 個人的には、南倉から出品の鉈（やりがんな）や錯（やすり）、刀子（とうす）や鑽（きり）など木工具などにも興味を持って拝見することが出来ました。大切に受け継がれてきた数々の宝物が証すこの国の物造りの歴史の深さや、命をかけて大陸を東西に交流してきた人々の営みの尊さを今の暮らしにも大切にしたいと思いがらすつかり暗くなった古都をあとに京へ戻りました。(当会副理事長・前飛騨国際工芸学園学長)



(国立奈良博物館会議室にて解説)

#### —お知らせ—

●「檜の会」今年度末の催事

◇新春のつどい 都山流 小山青山師によります 初春の演奏がございませう。

期日 一月三十日（日） 会場 「花薬」

◇一弦琴と投扇興

期日 三月五日（土） 会場 「ひと・まち交流館」

※参加費、申込要領など詳細は近日中にお知らせ致します。日程お繰り合わせの上、多数ご参加ください。

※ 今回の会報発行が大変遅れまして、お詫び致します。  
（ご意見）提案お問い合わせなどは事務局にお寄せ下さい。

連絡電話／ファックスは、当分の間、075-861-7802（荒木）迄。  
又は、075-921-6597（森口）迄。

(広報)会報制作担当：藤田・中田・柴田